

来年夏の参院選で改選される現職議員の任期満了まで、28日で1年となる。与野党攻防の鍵とされる「1人区」の本県選挙区は、自民現職の大沼瑞穂氏(39)が党公認候補に決まり、来夏に向けて動き出した。一方、野党側は連携を模索するものの、中央政界の混乱を受け、現時点では候補者選定もままならない状況だ。共産党県委員会は前県労連議長長の浜田藤兵衛氏(64)の擁立を表明している。決戦1年前の県内の状況を探った。

(文中敬称略)

参院選まで1年

動きだす県選挙区

①

「最後は全員が一致団結した。宏池会は、県知事吉村美栄子を支援してきた元参院議員の故岸宏一が所属した自派。当時、「知事寄り心には、大沼と吉村との距離感を気にする県連関係者

苦々しい思いを引きずる雰囲気がいまだに漂う。大沼本人は「県勢発展のため、知事をサポートするのは国會議員として必要だと思っ

2期目めざす自民・大沼氏

県連一枚岩なれるか

「もつと地域に」の声も

は多い。

必要なプロセス

大沼は15年2月、現党政調会長の岸田文雄が会長を務める宏池会(岸田派)に入る。初陣は、衆院議員遠藤利明(県1区)の全面支援を受けて戦ったが、遠藤衆院議員加藤鮎子(県3区)も所属する政策グループ有隣会入りを選択しなかつ

吉村が自民党本部幹部や閣僚と面会する際、頻繁に大沼が駆け付ける姿にも県連内ではいら立ちの声が聞かれた。17年の知事選は不戦敗となり、2期連続で有権者に県政トップの選肢を与えられなかった。

党本部への大沼の公認推薦は全会一致の形となったが、県連関係者は「そこに至るまでは」ガス抜きが必要だったとする。6月10日に非公開で開かれた選

対委では、各支部役員からさまざまな意見が出たという。大沼により細かく地域に入ってほしいという声もあつたと中堅議員が明かす。「丁寧に意見を聞いた」

だが、大沼は若く、現時点で大きな失点もない。あえて公募を行う積極的な理

大沼は早くから2期目に臨む意欲を示していた。5月の県連大会では、出馬表明のような勢いで真情を吐露。6月の選対委では現職の決意を重く受け止める声が大半を占めたが、「公募という決め方もあり得るのでは」と慎重な姿勢を示す役員もいた。10年の参院選では現職の岸がいるにもかかわらず、公募に踏み切った経緯もある。

大沼は早くから2期目に臨む意欲を示していた。5月の県連大会では、出馬表明のような勢いで真情を吐露。6月の選対委では現職の決意を重く受け止める声が大半を占めたが、「公募という決め方もあり得るのでは」と慎重な姿勢を示す役員もいた。10年の参院選では現職の岸がいるにもかかわらず、公募に踏み切った経緯もある。

大沼は公認候補決定後の記者会見で、5年間の政治活動を振り返りながら、こう語った。「地域の支部の皆さんと、細かに懇談できなかった点は大きいに反省する。地域の課題をより国政に反映できる態勢をつくりたい」。党の1次公認候補に決まったとはいえ、本当の意味で組織が一枚岩になれるかは不透明な部分はある。今後、どう結束を強めていくのか。自民県連の課題は明確だ。

来夏の政治決戦は自民にとって楽観視できない。大沼が初当選した13年の参院選は、全国的に安倍政権の経済政策「アベノミクス」の追い風に乗り、自民が優勢な戦いを展開する中で、県選挙区では現職との接戦を辛くも制した。野党候補が決まっておらず、対決構図は見えていないが、今度とは与党の現職として受けて立つ戦いになる。1年後の風向きは予測が難しい。



自民党県連としての擁立が決まり、決意を述べる大沼瑞穂氏(中央) = 7月14日、山形市・同県連会館

由は見つからず、県連幹部には「公募すれば、自民が内部分裂しているという印象を与えかねない」とする声があつたのも事実だ。

受けて立つ戦い

大沼は公認候補決定後の記者会見で、5年間の政治活動を振り返りながら、こう語った。「地域の支部の皆さんと、細かに懇談できなかった点は大きいに反省する。地域の課題をより国政に反映できる態勢をつくりたい」。党の1次公認候補に決まったとはいえ、本当の意味で組織が一枚岩になれるかは不透明な部分はある。今後、どう結束を強めていくのか。自民県連の課題は明確だ。